

# 「清心」

文責 校長 中原弘之

学校教育目標 「学校と地域を愛し、知・徳・体の調和のとれた児童の育成」

## 「学校だより」と「校長だより」

「学校だより」は、学校の行事や出来事を中心に、教頭文責のもと作成し、おおよそ月1回発行する予定です。職員の紹介は、「学校だより」に掲載しています。

一方、校長文責の「校長だより」を月2回程度発行する予定です。本号のように、表面に「学校だより」を、裏面に「校長だより」を掲載する場合があります。「校長だより」の号数は、昨年度からの通算としています。校歌の2番からとったタイトル「清心」は、校訓制定までは継続いたします。ご愛読のほど、よろしくお願いいたします。

## 「令和」は、明るく、元気な時代に

5月1日から元号が「令和」となります。東京五輪や大阪万博も開催される「令和」は、明るく、元気な時代にしたいものです。学校でも、次代を担う子どもたちを明るく、元気に育てていく所存です。

## 「祇園歴史の旅」

昨年度に続き、「祇園歴史の旅」のコーナーを設け、郷土史誌などを参考に、地域の歴史などを紹介します。昨年度のものは、祇園小学校のホームページに掲載しています。

### 祇園歴史の旅（その36）「祇園町と祇園宮」

中部地区町内協議会設立25周年記念誌（平成20年発行）、佐世保史談会会員の筒井隆義さんの記念エッセーより抜粋。

「古来人々が最も恐れたのは天災と病でした。特に夏に流行する疫病は、老人や子供を含む一家すべてが死に絶え、時には村が全滅するほどの痛手をこうむりました。病原菌の存在を知らない人々は、疫病を神や鬼のたたりだとして、これを祀（まつ）ったり、おはらいをして難を除けようとしてきました。

祇園宮は、インドで釈迦が仏法を広めた祇園精舎の守護神・牛頭天王を祀ります。仏教が中国を経て日本に伝来するとき、密教の一部として占星術に似た宿曜道（すくようどう）と結びつき、日本固有の悪霊信仰とも合体して疫神になりました。明治時代から地名をとって京都は八坂神社になったのが祇園宮です。

京の祇園祭、博多の祇園山笠など、祇園宮にちなむ悪霊退散の夏祭りは、台車を仕立てて華やかな飾りをつける山、同じく台車の上に鉾（ほこ）を立てる鉾、それに鉦、太鼓、笛の賑やかな祇園囃、神さまがのりうつる稚児行列で催されます。明治の神仏分離で祇園宮も痛手をこうむり、他の神社になったり消滅してしまいました。

佐世保の祇園町も、かつて町内に祀られていたと思われますが、その所在は不明です。祇園町の高台は、祇園尋常小学校などが立地し、近代に大きく姿を変えました。神社は原則として一村一社とする合祀令によって、おそらく須佐神社に合祀されたと思われますが、確認できません。

小佐世保川の源流近く、水利の八龍神社が祀られています。治水の八大竜王は、稲作を中心とした日本農業と深く結びつき、水不足のときの雨請い、大雨の治水を祈願しました。ここでは、神に捧げる神楽に須古踊りを奉納しており、佐世保市域では浮立（ふりゅう）が盛んな中で特別な存在です。

このほか、光月町の地名となった光月という地名も、今日では由緒不明ですが歴史を秘めていると思われます。それは、指方町にある指方庄左衛門の墓が『光月神社』と呼ばれているように、『こうげつ』と発音する漢音、さらには薬師如来の脇侍をつとめるのが日光、月光の両菩薩であるなど、光月の文字は何かいわれがあるようです。

いま一つ、町名に残っている熊野町も、敗戦の昭和二十年前半まで熊野神社として残っていました。熊野信仰は、平安時代の中ごろから、天台宗の本山派修験道の拠点となり、『蟻の熊野詣で』と称されるように、上は法皇上皇から一般庶民にいたるまで、引きもきらずに参詣した熊野三山で知られています。

熊野町も、近代化する以前から熊野権現が祀られ、地元民が御師（おし）・先達（せんだつ）と呼ぶ熊野神人（じにん）と共に熊野詣でをしたのでしょう。」

今回は、「大正時代は産業化と港の整備」と題して、大正時代の発展などをご紹介します…。